佳作賞受賞者

佳作賞
「送る日の雨」
『飢餓祭』37号

田中　青氏

田中　青（たなか・あお）
一九五一年大分県生まれ。兵庫県神戸市在住。
山口大学文理学部卒業。印刷会社勤務後、フリー広告デザイナー（二〇〇五年まで）。
ＮＨＫ文章教室（竹内和夫先生）約三年間受講。大阪文学学校四年間在籍。
「港の灯」・「飢餓祭」・「交差点」同人。

「送る日の雨」

九十三歳で亡くなった母親の家族葬に六人の子どもたちが集まった。七十歳を筆頭に女・女・女・女・男・女のきょうだいで、末子のさと子は五十八歳、長姉とはちょうどひと回り十二歳の開きがある。そのさと子の視点で、過去から現在に至る家族の有り様ときょうだいの確執を、二日間の葬儀を軸にして描く。

兄嫁・恵（めぐみ）から訃報が届いた。土砂降りのなか、さと子は神戸から九州へ車で向かう。関門橋を渡って葬儀場に到着すると、喪主である兄・直人はもちろん、九州各地から駆けつけた長姉、次姉、三姉はすでに着いて親族控え室で待っており、あとは東京からの四姉・ヨウ子を待つばかりだった。雨は小止みになる。

やがてきょうだいが揃い、宿泊をかねた葬儀場の一室で夜とぎが始まる。それぞれの連れ合いや子どもたちは合意の上で引き上げてもらい、ここではきょうだい六人水入らずである。

母の柩を中心に、デスマスクがさと子のアゴに似ているとか、どうしようもない血が流れているなどの会話がなされるなか、きょうだいのおぼろげな確執が見えてくる。

放蕩だった父親のこと、母親の狂気じみた気の強さなども語られ、さらにもう一人のきょうだい（美智子という異母姉）の存在も、四十五年前の雨の夜の回想で示される。

きょうだいの歳がちがうように、育った時代環境も異なる。上の三人は終戦の日以前に生まれ、四姉は当の八月ど真ん中に生まれ、下の二人は終戦後に生まれた。そのちがいは大きい。

柩を中心にして、さらに回想へ入っていく。二十年前、母の命にかかわる病があり、その退院祝いの席で、長姉とさと子の深い亀裂が生まれた。病気の母をただただ助けたいだけの長姉に対し「はよう死にてえ」という母。ならば死なせてやれというさと子。厭世的な母を受け継いださと子の失言であるが、長姉とのこの決定的な対立は、その後解消されることはない。

きょうだい同士の対立はこの二人に限らず、六人全員がそれぞれことあるごとに反目しあってきた。その関係は兄一人を中心に置く陰陽五行説の五角形図のように相関している。さと子と四姉ヨウ子は仮眠をとりながら語り合う。なぜこれほどまでにいがみ合うのか――。最後にヨウ子がいう。「あたし、高瀬の血がきらい」。

夜とぎがおわり、告別式の日。

その法要の終盤に一組の訪問者があった。車椅子の義姉・美智子と、それに付き添う彼女の息子だった。物言わぬ美智子は母の柩に一本の花を手向け、去って行く。

舞台は火葬場に移る。ふたたび土砂降りになる。

待ち時間のロビーで、さと子は三姉と話し込む。若い頃美智子と付き合いがあった三姉である。四十五年前の雨の夜事件の真相が語られる。あの時は美智子に鬼の形相で刃物を振り上げた母であったが、じつはその後があったのだ。激しいばかりではない母の一面が語られる。

――ただ、一姉ちゃんがいつだったか、ぽろっと言うたことあるんよ。みっちゃんの息子さんはお母ちゃんが大きぃしたようなもんや、て。どういうことかようわからんやったけど、いま思えばなんかわかるような気ぃするねぇ。お母ちゃんらしい、というか……――（三姉の台詞より）

数時間が過ぎて、母のからだは骨になった。焼却炉から出てきたそれを前にしたとき、次姉の思いが吹き出す。

――十人が二手にわかれて骨を拾った。黙々とした作業の途中、とつぜん私の向かいで次姉がうなるような声を出した。色白の、普段は冷たい蠟人形にも似た肌が真っ赤だった。歯を食いしばって嗚咽を堪えている。幼い時から外に出され、他人の中で大きくなった姉だ。親のもとで育った私たちにはない、哀しみかただった――。

そのようにして葬儀は終わった。

翌日朝、さと子は神戸へ向けて九州を発った。関門橋をふたたび渡る。青空がまぶしかった。